The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	歴史的民族誌から再考する国家と狩猟採集社会の関係：トゥワ・ピグミーの事例
Author(s)	ふくだ，ぺろ
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2025, 36, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100832
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『スワヒリ＆アフリカ研究』36 号（2025）pp.1-24

歴史的民族誌から再考する国家と狩猟採集社会の関係
― トゥワ・ピグミーの事例 ―

Rethinking Hunter-Gatherer/ Nation Relations with Historical Ethnographies:
The Case of the Great Lakes Batwa

ふくだぺろ*
FUKUDA Pero

0. はじめに

筆者は 2019 年から 2022 年の間のべ 12 ヶ月に渡って、ルワンダ共和国北部州にある X 村でトゥワ・ピグミー[1]の社会について参与観察を実施してきた。元来ビルンガ火山群の森で遊動型の狩猟採集生活を送っていたトゥワは 1970 年にカイバンダ政権下のもとで一部が半定住化し、残りは遊動を継続しながら狩猟採集を継続していた。しかし 2000 年にカガメ政権によって現在地に定住させられ、狩猟採集を禁止された。定住して 20 年が経過しても農耕化せず、即時リターン指向[2]、政治的・経済的な平等主義など典型的な狩猟採集社会[3]の特徴を示していた。しかし、こと暴力になるとトゥワは典型ではなかった。平和で争いごとを好まないピグミーという定説(cf. Turnbull 1961; Kelly 2013) に反し、彼らは集団内で

* 立命館大学先端総合学術研究科博士課程 (Graduate School of Core Ethics and Frontier Science, Ritsumeikan University) 。なお、本稿に対して小川さやか氏、西浦まどか氏、西尾善太氏、編集委員の小森淳子氏、匿名の査読者の方から有益な助言をいただいた。ここに記して感謝したい。

[1] 中央アフリカの森林地帯に住み、相対的に低身長で狩猟採集を生業とする先住民をピグミーと総称することに対しては、植民地主義的、蔑称的、単一文化指向という批判もある (Hewlett 2014; Verdu & Destro-Bisol 2012)。他方で音楽様式、儀礼の構造、アイデンティティとしての狩猟採集、デマンド・シェアリングを基準とする経済、平等主義的な社会組織、地域における「先住者」としての地位など共通点も数多いのが、総称される理由である (Lewis 2014)。本稿がトゥワをあえてピグミーとして論じるのは第一に、筆者がフィールドで接した少なくないトゥワが「ピグミー」や「ムブティ」と自称するからであり、第二に、後述するようにピグミー研究が無視してきたトゥワをピグミー研究の文脈に位置づけることで、先行研究を相対化、多様化する意図からである。

[2] Woodburn (1982) は即時リターンと遅延リターンの二種類の社会システムを想定した。即時リターンシステムでは即時的かつ直接的に収益が獲得される。対する遅延リターンシステムでは、収益の獲得に労働を長期間投資しないといけない。遅延リターンシステムを採用する社会が階層化するのは、労働投資と消費の間にある時間差によって、労働と収益の分配、資産管理の権限などが階層構造を求める結果である。単純狩猟採集が即時リターンに該当するのに対し、複雑狩猟採集、農耕、牧畜、資本主義などは遅延リターンに該当する。

[3] 1960 年代に狩猟採集社会研究が学術領域として確立される過程で、狩猟採集だけでなく小規模な菜園も営む狩猟園耕社会や階層的な複雑狩猟採集社会は周縁化され、遊動的で小規模なバンド型である単純狩猟採集社会が純粋な狩猟採集社会として正統化された。本稿でも狩猟採集社会という用語を単純狩猟採集社会と同義で用いる。

毎日無数の闘争に従事し、鉈や棍棒を振るい、10 日に一度は血が流れていた[4]。こうした事態に対し、トゥワの人々はあっけらかんと「闘争はトゥワの文化だ」と語っていた。

木村 (2003) はバカ・ピグミーの「共在感覚」として長い沈黙や一斉に会話する共鳴性を指摘したが、同様の現象はトゥワにも見られ、ひとたび闘争が起こればその興奮は周囲へと伝染する。重要なのは、全員が一様に同じ闘争へと収斂してエスカレートするのではなく、おしゃべりや音楽、傍観などのあらゆる実践が呼び込まれ、異なる実践へと転遷しながら拡散していく点にある。トゥワは闘争を怒り／悲しみ／狂気 (amahane[5])、「ミュージッキング[6]」を幸せ／喜び (kwishima) の感情実践として理解しており、彼らの身体群は同時にあらゆる感情＝身体へと開かれる。年齢やジェンダー等の別なく、あらゆる感情表出が許容される感情＝身体の平等性こそが、交感的なトゥワの「平等主義的暴力」の核にあり、近代的な支配と抑圧の暴力と決定的に異なると筆者は論じた (ふくだ 印刷中)。

一方、ルワンダは 1994 年の虐殺やその後現在まで続くコンゴ戦争に関与している地域であり、外部者の視点からすればこうしたトゥワの暴力が近年の国家暴力に起因していると推測されがちである。しかしトゥワの人々は自分たちの暴力と 1990 年代以降の国家暴力を無関係だと主張しており、そうした憶測とは正面から衝突する。トゥワの人々に彼らの暴力の歴史を聞くと、1970 年以前の完全遊動時代から諍いは絶えなかったとする者と、昔は誰もが愛し合って争いのない世界に住んでいたとする者とに分かれる。1980 年代に流行した腸チフスのせいで 60 歳を超える老人がほとんどいないことが、聞き取り調査からトゥワの歴史を再構築することを困難にしており、聞き取りとは異なる手法が求められる。

そこで本稿では、先行研究が無視してきた 20 世紀前半のトゥワの歴史的民族誌と筆者の民族誌データを照合させながら検討することで、トゥワの暴力の歴史性について考察する。Schumacher (1950) などによれば、トゥワは遊動時代から集団内の闘争も盛んなだけでなく、他集団とも戦争状態にあり、農耕民を襲撃し、略奪すること頻繁であった。従来、ピグミー系集団に代表される狩猟採集社会は平和を好み非暴力的であると理解されてきたのとは対照的である。本稿ではこうしたトゥワの歴史的暴力について、ルワンダ北西部の在地勢

---

[4] X 村のトゥワ人口は 81 名（2020 年 10 月 30 日時点）。

[5] 本稿に登場する現地語はすべてルワンダ語であり、基本的に「日本語訳 (ルワンダ語) 」で記す。ルワンダ語のラテン文字表記については正書法に従う (Republic of Rwanda 2014)。ただし現地語をカタカナ表記する場合、ラテン文字表記ではなく、実際の発音を優先させた。例えば、Bwimba は「ブウィンバ」ではなく「ブグウィンバ」、Basebya は「バセビャ」ではなく「バセブジャ」と表記する。ただし「ルワンダ (Rwanda) 」など慣例となっているものは従来の表記に従う。

[6] ミュージッキング (野澤・川瀬編 2021) とは、音楽を静的な対象ではなく動的な行為として捉え直す概念であり、また音楽の成立に関わる諸行為もミュージッキングとして内包される。従って本稿の場合であれば、いわゆる「歌う」「演奏する」だけでなく、「踊る」もその範疇に入る。

力と新興国家であるニギニャ (Nyiginya) 王国[7]、そしてトゥワの三者関係[8]を軸に考察する。そうすることで現在のような彼らの暴力がいつから、どのような要因に影響されて起こっているのかという暴力の歴史的動態を明らかにし、狩猟採集社会と他民族、国家の関係について再考する。

1. 先行研究と本稿の視座

1.1. ピグミー研究と国家

宗教や儀礼、ダンス、自然との関わり、食物分配、児童の養育など多様なテーマを追究してきたピグミー系集団に関する研究は、その外部とも言える農耕民との社会経済的な関係に関する研究の蓄積も豊富である (Takeuchi 2014; Rupp 2003, 2011; 松浦 2012; 北西 2010; Joiris 2003; Köhler and Lewis 2002 などを参照)。その軸となるのが農耕民をパトロン、ピグミー系をクライアントとして結ばれるパトロン・クライアント関係の実態調査であるが、両者の関係はピグミー系集団や地域的状況によっても異なる。支配・被支配、協調・対立の複雑なグラデーションが見られるものの、概してピグミー系が農耕民に対して従属的な立場に置かれるとされてきた。一方で、ピグミー系と近隣農耕民というミクロな二者を超えた外部、つまり国家との関係に関する研究は少ない。コンゴ盆地にもコンゴ王国、ロアンゴ王国、ティオ王国などの国家が存在し、象牙取引や王朝創設神話を通じてピグミーと関係していたことを思えば些か奇異でもある (Kleiman 2003: 198-205)。その原因としては第一に、ピグミー系集団の研究が人間の自然状態への政治学的な関心を主要な動機の一つとして発展してきことが考えられる。つまり「ターンブル・シンドローム」 (Frankland 1999) とも批判されるピグミー系を理想化するバイアスが、国家とピグミー系集団の関係を意識的、無意識的に切断しがちであったと推測される。また、集権的な社会機構を持たないピグミー系集団の社会性が社会構造として認識しにくいため、ミクロな相互行為そのものを社会性として抽出する (e.g. 木村 2010: 71-72) という方法論の死角に、国家が存在したとも考えられる。とはいえ、国家とピグミー系集団の関係に取り組んだ研究が存在しない訳ではない。特筆すべきは大石 (2016) であり、バクウェレとバカ・ピグミーの「分離的

---

[7] 別名ルワンダ王国。王統を輩出したクラン名から歴史学ではニギニャ王国と称される。

[8] エスニシティ／民族として言及されてきたトゥワ・トゥチ・フトゥという分類 (ubwoko) については鶴田 (2018)、武内 (2009) を参照。この分類は植民地期以前から存在するが、ニギニャ王国に顕著な区分であり、植民地期にルワンダ全土に導入、人種として固定された。本稿の対象である 20 世紀初頭のルワンダ北西部のような周縁からすれば、トゥワというアイデンティティは存在しても、フトゥというアイデンティティは存在せず、チガ、ブゴグウェなど地域的なアイデンティティが強かった。そしてトゥチとは一様にニギニャ王国から来た人間を指す言葉であった (cf. Newbury 1988: 253 n34)。以上の観点から、本稿では歴史的に言及する場合、フトゥ、トゥチという呼称は用いない。フトゥはトゥワの視点から「在地民」と総称するか、チガ人など個別具体的な呼称を適宜用いる。トゥチは本稿ではニギニャ王国に相当する。ただし引用及び、トゥワ・トゥチ・フトゥという三者関係が確立した植民地政府期以降の視点から言及する場合はその限りではない。

共存」を分析するのに国家などの外部世界との関係にも注目し、農耕民と狩猟採集民という二項対立を超えて、商業民を含めた三者関係で現在のバカ・ピグミーについて考えるべきことを提唱した。

1.2. 無視されてきたピグミー系集団トゥワ

先述した理想化のバイアスは、研究テーマだけでなく研究対象にも作用した。より農耕民の影響を受けていない「純粋な」ピグミーが研究者の進化主義的な関心を惹いた結果、コンゴ盆地周辺に20程度存在するピグミー系集団のうち、ムブティ、エフェ、アカ、ムベンジェレ、バカの５集団で先行研究の 86%を占めるという偏りが生じている (Bahuchet 2014: 6-7)。こうして無視されてきたピグミー系集団の一つがトゥワである。トゥワはムブティやアカと並んで最初期から研究されていた。しかし20世紀中盤までの人類学の基準では、男性の平均身長が150cm以下の民族がピグミー、トゥワのような150cmを数センチ上回る民族は環境的ないしは遺伝的な影響により純粋でなくなった亜ピグミー (Pygmoid) に分類され (グシンデ 1960: 8)、研究価値が低いとされた。

しかし、ピグミーを考古学的な遺物とするような見解は現在では退けられており、純粋なピグミーという発想そのものが無効となっている。歴史言語学および遺伝人類学双方の見地からピグミーと農耕民は従来推測されていた以上に混じり合ってきたと考えられている (Kleiman 2003; Verdu 2016)。他方、近年の文化社会人類学の文脈では、ピグミー系集団の一様性ではなく多様性に焦点をあてた研究が注目されており、トゥワのようなこれまであまり研究されてこなかったピグミー系集団へのアプローチが求められて久しい (Hewlett 2014)。

トゥワが研究されてこなかったもうひとつの理由は、彼らが定型から大きく逸脱し、狩猟採集民ではなく「複雑なカースト社会の陶師、従者、音楽家だった」(Bahuchet 2014: 5) という認識から来るが、端的にこれは誤りである。1930年前後のトゥワの推計人口9000のうち、定住者が6500、狩猟採集者が2500であり (Gusinde 1949: 25)、1/3程度が「定型的」であった。しかし、狩猟採集を継続していたトゥワも、ニギニャ王国という強大な国家から無縁で生きられた訳ではない。またニギニャ王国はクラン・リネージ政体とは異なる論理で動く「国家」であるとはいえ、近代的な国民国家や領域国家とも異なる (武内 2000)。近代的支配が確立する以前に、トゥワと国家がどのように関係していたのか具体的に検討することで、従来とは異なる狩猟採集社会と国家の関係に関する視角を獲得できるだろう。

1.3. 本稿の研究視角

ここで、トゥワの歴史的暴力の検討を通して、狩猟採集社会と国家の関係を再考することを目的とする本稿の研究視角を整理する。第一に、トゥワというこれまで無視されてきた集団に注目するというマージナルな視点である。その際に、ピグミー研究における三者

関係の重要性を指摘した大石 (2016) に倣う。農耕民対狩猟採集民という定型的な二項対立から脱却し、森で狩猟採集に従事するトゥワ、森林開発を進めトゥワと敵対関係にあった在地勢力、当時ルワンダ北西部に進出してきた新興軍事国家であるニギニャ王国の三者関係を基礎に分析する。この三者という視点の重要性はピグミー研究だけでなくルワンダ研究の文脈においても重要である。トゥワという第三項を挿入することで、ルワンダ研究において支配的なトゥチ・フトゥという二項対立を乗り越えることが可能となる (Taylor 2011)。

第二に、暴力に注目する。国家の重要な機能として「警察や軍隊組織による暴力の独占」と「国民からの暴力の収奪」がある (山内他編 2005)。暴力の扱いは国家の根幹に関わる問題であり、トゥワとニギニャ王国をはじめとする王国群や社会集団間の暴力のあり方を検討することで、国家の性質や狩猟採集社会の性質を逆照射できると考えられる。主要な先行研究では、ピグミー系集団に代表される狩猟採集社会の特徴のひとつに非暴力を挙げてきた。その中で研究者は彼らの平和を本質化することなく、「非攻撃の学習」(Montagu 1978) を解明することで、狩猟採集社会が受動的な存在ではなく、積極的かつ動的に平和を創造していることを論じてきた (Turnbull 1978)。その鍵となるのは、Woodburn (1982) が狩猟採集社会一般について論じた、遊動性と回避理論 (avoidance theory) である。端的に言えば、対立する相手、支配しようとしてくる相手と正面から対決するのではなく、その場を去るという行動機制である (Lewis 2014)。政治人類学の文脈で言えば、国家からの支配を逃れて「国家から逃走する社会」を論じたスコット (2013) の議論に接続すると言える。他方、政治人類学には、小規模社会が間欠的に戦争をすることで国家の発生を防ぐとするクラストル (1987) の「国家に抗する社会」の議論がある。本稿では逃走と闘争をキーワードに、暴力を起点にトゥワと国家の関係について分析することで、ピグミー研究だけでなく、広く狩猟採集社会と国家に関する議論に貢献することを目的とする。

1.4. トゥワの歴史的民族誌について

以下、本稿の主要な分析対象について記述する。トゥワを扱った歴史的な民族誌、中でもペーター・シューマッハの大著『中央アフリカのキヴ・ピグミー (トゥイーデン) への遠征 I. キヴ・ピグミーの物理的および社会的環境』 (1949)、『中央アフリカのキヴ・ピグミー (トゥイーデン) への遠征 II. キヴ・ピグミー』 (1950) である。シューマッハはドイツ・ラインラントの出身であり、アフリカ宣教師団 Missionarii Africae (通称：ホワイト・ファーザーズ) に入って 1908 年からルワンダで布教活動に従事し、1928 年に宣教師団を辞めて専業研究者となった[9] (Schebesta 1958)。その後の５年に及ぶ調査の集大成が『キヴ・ピグミ

[9] ウィーン学派の創始者であるウィルヘルム・シュミットは、宗教が一神教から始まり、後に多神教が生まれたとする「原始一神教」論を主張した。その論を証明するために、1925 年ローマ教皇ピウス 6 世の支援のもとモーリス・ヴァノヴァベルクをルソン北部のネグリト研究に、

ー』二巻だが、同書の第一の特徴は協働性である。シューマッハは言語に堪能で、常日頃から研究対象と親しみ、地域のなかで役割を持って共に生きている宣教師研究者ならではの研究を達成しようと、トゥワを客観的な科学の対象に矮小化することを拒否した。自律性を持った調査の協働相手とトゥワを見なし、人類学者の声が著作を支配するのではなく、人類学者と先住民の声を対話の中に対等に位置付け、読者に解釈の自由を提供しようとした (Shcumacher 1949: 10)。従って、本書は学術書でありながら全体の記述に会話的なトーンを含み、詩的な表現に溢れているが、こうした方法に問題がないわけではない。それが第二の特徴となる、冗長性と難解さである。Schebesta (1951: 1045) は、長い会話や詩的な表現のお陰で本書が不必要に長くなっており、研究書としては無駄が多く読みづらい点があると苦言を呈している。これは具体的な表現においてもそうで、Gusinde (1952: 247) はシューマッハの正確さを欠いた表現、複雑な構成の難点を指摘している。実際、相互に矛盾するような会話もそのまま載せており、どう理解したらいいのか苦しむ箇所もままある。

一方で、当時の人類学・民族学では、ピグミーを最古の人種の遺物として石器時代と変わらぬ存在であるかのように扱い、あるいは人体を計測して機械的な基準で分類する分類学が主流だった。そうした学問的潮流から離れて、対象となる社会や言語への深い理解を要求し、トゥワをただの調査対象に矮小化することなく、研究における調査相手 (Interlocutor) の主体性を前面に出そうとしていたシューマッハの姿勢は貴重である。主観と客観を問題化し、表象の問題を乗り越えようと民族誌の方法論を探求した 1980 年代の実験的民族誌 (クラパンザーノ 1991 など) を先取った先進的な試みであったと言えよう。

このように先進的で、ともすると難解であることが、『キヴ・ピグミー』が先行研究から無視されてきた理由だろう。ドイツ語という英仏語に比べれば相対的にマイナーな語で書かれていることも理由の一端だろう[10]。『キヴ・ピグミー』がこれまで読まれてこなかったのは理由のないことではない。しかし、Bahuchet (2014: 5) が指摘したように、今こそ『キヴ・ピグミー』に注目する必要がある。ピグミー研究にいまも残存する理想化された「本当の」ピグミーというステレオタイプを乗り越えるためには、非典型的なピグミーの緻密かつ具体的なデータを検証する必要があり、5 年に及ぶ調査を 1000 ページの大著にまとめ上げられた同書以上に重要な資料はなかなか存在しない。

2. 20 世紀初頭前後のルワンダ北西部とトゥワ社会の概観

2.1. 当時のルワンダ北西部の社会情勢

まず現代のルワンダ史研究[11]に基づき、20 世紀初頭のルワンダ北西部の政治社会情勢に

ポール・シェベスタをマレーのセマン研究に、そしてペーター・シューマッハをルワンダのピグミー研究に指名し、国際的な比較研究を主導した (Gusinde 1954; Schumacher 1949)。

[10] 筆者はドイツ語に堪能ではないが、機械翻訳を駆使することで同書を解読した。この人工知能を用いた新しい研究の具体的な方法論については付録を参照。

[11] 主に参照したのは Des Forges (2011)、武内 (2009)、鶴田 (2018)、Newbury (2009)、Vansina (2004)。

ついて説明する。現在のルワンダ共和国に相当する地域にはニギニャ王国[12]以外にもブシル、ルヘンゲリ、ブソゾ、ギサカなど 15 程度の王国がかつて存在したが、キゲリ・ルグワブジリ王 (Kigeli Rwabugiri　在位 1860-95) のもとで大湖地域最大の軍事国家となって拡張したニギニャ王国は、現在のルワンダ共和国より広い範囲を版図とした。王から土地を下賜される土地制度イギチンジ (igikingi) の普及に代表されるようにニギニャ王国はアフリカには珍しい中央集権型の国家とされるが、本稿の対象となる北西部のような周縁地域 (図 1 参照) に焦点を当てた場合、いくつかの留意点が必要である。第一に、ニギニャ王国は領域国家ではなく、パトロン・クライアント関係をもとに国家を形成する人的国家であり、また主従の関係の破棄、再締結も比較的容易だったので、領域を面的に支配していた訳ではない。第二に、ブシルやブゴイのように、相当程度自立した王国も存続していた。第三に、ルワンダ北西部はユヒ・ムシンガ王 (Yuhi Musinga 在位 1897-1931) の時代になってもイギチンジの導入に抵抗し、中央から役人を派遣することができない、まつろわぬ者どもの地だった。この地域の実効支配はドイツやベルギーの軍事力を以てはじめて成し遂げられ、その過程で多数の紛争、反乱を招いた。例えばブゴイ、ムレラの王権は必ずしも強くなかったが独立志向が激しく、ブシルはトゥチの支配に頑強に抵抗し、ドイツ軍とも争った。一方で、ブゴイのニュンドやムレラのルヘンゲリには宣教師団ホワイト・ファーザーズの伝道所があり、地元民はニギニャ王国に対抗する手段としてホワイト・ファーザーズを利用した。またホワイト・ファーザーズも信者を増やすために信心の動機は問わず、地元民のパトロンとなり、彼らの利益を代弁することもあった。第一次大戦後にドイツに代わりルワンダを統治するようになったベルギーは反西洋色のあるムシンガ王に次第に不信感を抱き、王に対抗する諸侯を支援するようになる。フトゥ系王国群、ニギニャ王、ニギニャ王国諸侯、宣教師団、植民地政府という複数のアクターがそれぞれの利害関係に応じて適宜合従連衡した。最終的に 1930 年代には

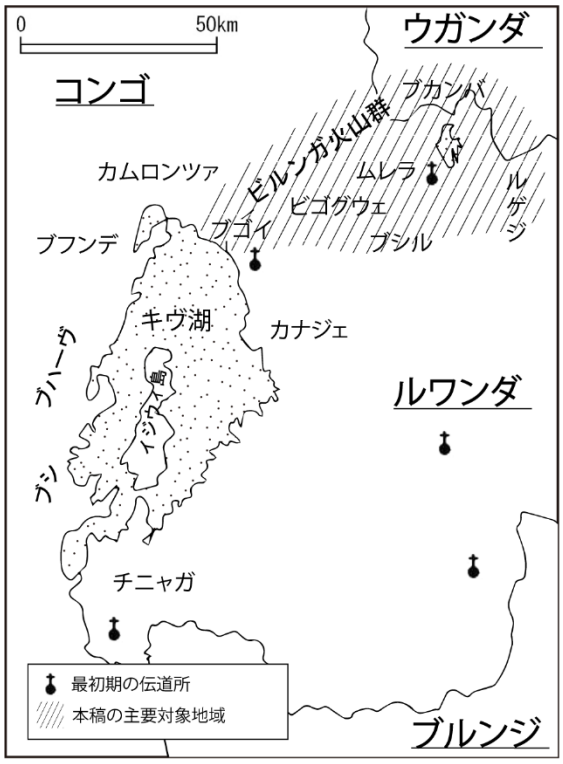

図 1　20 世紀初頭のキヴ湖周辺の地図
(筆者作成)

[12] 王国の年代記を分析した歴史学者たちは開祖ルガンズ・ブグウィンバ (Ruganzu Bwimba) の即位を 14 世紀前半から 16 世紀後半の間と推定している (Newbury 2009: 277)。歴史学者によって創設時期に 200 年以上の差があり、また Vansina (2004: 207-216) はルガンズ・ンドリ (Ruganzu Ndori) 以前の 6 代は実在しないと判断し、王国の創設を 17 世紀頭とする。

強大な軍事力を背景に植民地政府が支配を固めるが、その過程で地方の抵抗は鎮圧され、ニギニャ王国は換骨奪胎されてムシンガ王は追放され、キリスト教色の強いムタラ・ルダヒグワ王 (Mutara Rudahigwa 在位 1931−1959) が即位する。植民地経営の利益化のもと民衆は重税に苦しみ、イギリス領東アフリカへの出稼ぎや逃亡が続出し、形骸化した王国では西洋式のエリート官僚が台頭した。こうした動乱の時代にトゥワはどう対応したのだろうか。

2.2. トゥワの社会

ここからは主として Shcumacher (1950) に依拠しながらトゥワについて記述する。シューマッハが調査したキヴ湖の東西にまたがって森で暮らすトゥワの中でも、筆者の調査地域に相当するムレラ（図 1 参照）のトゥワを中心に論じる。

この地のトゥワにはビルンガ火山群の森の境目にある定住地に居を構えながら狩猟採集をするものもいれば、遊動して暮らす者もいた。5-10 程度の家族で構成されるバンドが彼らの生活単位であり、それ以上に増えると分裂した。階級や身分は存在せず、全員が自由民であった。経済的にも平等であり、貧富の差はない。また正式な祭司、呪術師、占卜師の類いは存在せず、祖先奉仕のような祭司的な役目は家長が全員に無料で行った。それぞれのバンドは男性のリーダーによって率いられていたが、リーダーは他のトゥワと見た目や服装も同じであり、その地位を確認できる儀礼や儀式は存在せず、他のトゥワと同様に生活のために狩猟に参加した。議題があれば適宜開かれる公的な集会にはコミュニティの全員が参加した。最終的な決断はリーダーが下すが、決定に納得がいかないものは自由に他の集団に移動した。年齢階梯はなく、地位の区別もないが、年長者やリーダーは自然と敬われており、年長者から年少者へと口頭でトゥワの歴史や文化が伝承された (Shcumacher 1950: 224-226)。

シューマッハの調査相手はほとんどが年長の男性であり、女性に関する記述は少ないうえに、女性自身の発言は引用されないというバイアスがある。ただし男女は平等であり、女性は独立しているとされた。夫と対等に口論し、夫の待遇に納得がいかない場合は実家にもどって新しい家族を探すので、夫婦はたがいを神 (imana) として扱わないといけないとされた (Schumacher 1950: 213, 235-236)。またキヴ湖西部のトゥワでは、女性が杖や弓矢を武器として戦争に参加した (Schumacher 1950: 108)。

経済については「その日暮らしの気楽な人々」 (Schumacher 1950: 361) であり、貯蓄は忌避された。例外は王権との交換に役立つ象牙と毛皮であるが、交換の結果得られた家畜 (象牙一本が牛 15 頭に相当) はすぐに消費された。象狩人のような経験豊かな狩猟者は尊敬されたが、そこから更に栄誉を受けることはない。獲物も均等に分配されるので、特に狩猟に長けた人間が利益を得られるわけでもなく、誰もが分け前に預かれた。女性の収穫物は原理的には核家族のものだが、実際上は他の家族とも共有される。アフリカスイギュ

ウ、アンテロープ、イノシシなどの狩猟には犬の群れを用いるが、トゥワは犬を恒常的に飼育することはなく、在地民から犬を借りる[13]。そして、肉や革、蜂蜜、野生植物などと芋、バナナ、塩などを交換した。在地民と狩猟についてもめた場合、トゥワは、ニギニャ王国の特定の王と忠誠の誓い (igihango) を結んだ結果、狩猟権を与えられたのだ、と自分たちの正当性を主張した。更にはニギニャ王から直接狩猟の許可を与えられた相手にも「王は狩猟の許可を与えたかもしれないが、森の所有権も譲渡したのか？ 料金を払え、さもないと森に入ることを禁じるぞ！」 (Schumacher 1950: 233) と狩猟権のリース料を要求した。

記述されている社会様態から判断する限り、ビルンガ・トゥワはピグミーらしい、自由と自律が重んじられる平等主義的な即時リターン社会を形成していたと判断するのが妥当だろう。特筆すべきは狩猟犬を在地民から借りるという共生や、ニギニャ王との契約を根拠とする狩猟権の主張など、ビルンガ・トゥワと他集団の関係であり、次節ではこの点をみる。

2.3. 他集団とトゥワ

Kleiman (2003) や Schoenbrun (1998) によると、土地利用に際して先住民であるピグミーの祝福が必要だとする発想は大湖地域やコンゴ盆地で広く見られる現象であり、ニギニャ王国でも戴冠式にはトゥワの臨席を必要とした[14]。これは西キヴのブフンデ王国やブテンボ王国でも同様であり (Schumacher 1950: 130)、こうした象徴体系上の地位がトゥワをして、自分たちは「王と対等な立場である」 (Schumacher 1950: 355) と言わしめ、様々な特権を保有した。

トゥワはトゥチなどの為政者に対して信頼できる盟友として振る舞うが、あくまで自らの自由と自治を前提としていた。そうしたトゥワの性質を理解していたニギニャ王国やブフンデ王国では、法に照らして明らかな不正義があったとしてもトゥワに無制限の自由を与えた。問題が生じても王は申し訳なさそうに首を横に振り、「彼らはトゥワだから」の一言で問題が解決した (Schumacher 1950: 362)。トゥワは好ましい社会的地位を得、無制限の法的保護を享受し、妨げられることなく物乞いをする機会を与えられており、「自分と自分の家族の生活のためにあらゆるフトゥの畑、トゥチの家畜から、トゥワは好きなだけ持ち去って良い特権を持っている」 (Gusinde 1949: 24) とされた。

またルワンダ北西部にはウブコンデ (ubukonde) と呼ばれる土地所有権が存在したが、トゥワは森の支配者である先住民なので、トゥワに謝礼 (urwugururo) を支払って初めて開墾者はその土地の権利を主張することができた。また前節で言及したトゥワの森林所有権は

---

[13] 犬の持ち主への謝礼はアンテロープ、ブッシュバックなどの革８枚 (Schumacher 1950: 234)。
[14] 王国の祭司であり王位継承に影響力を行使した Abiru は先住民トゥワの子孫だという説もある (Schoenbrun 1998: 157)。

ウブコンデ・ブギンゾジェラ (ubukonde bw'inzogera) [15]と呼ばれ、他集団が森で狩猟もしくは野生植物を収穫する際に使用料を要求した。しかし農耕民、牧畜民からの開拓欲求が高まるにつれ、トゥワの森林所有権は消滅していった (Byanafashe & Rutayisire 2016: 122)。

次に、こうしたトゥワの特権に対応するトゥワの義務を見たい。森のトゥワと王との関係は緩い封建関係とも言えるもので、トゥワは象牙や毛皮の税を課されているが、納入期限も非常に流動的であり、実質は自発的な贈り物に近かった。それ以外には税を払わず、公役にも従事しないが、軍事活動には熱心に参加した (Schumacher 1950: 226)。またベルギー統治の元では、象の狩猟が禁止された結果、トゥワに課される税は無くなった。

まとめると、先住民として遇されていたトゥワは王権にとって政治的に重要な象徴性を持ち、税や法遵守といった国民の義務を免除される一方で、森林の用益権を保持していた。しかし森林開発が進むなかでトゥワの用益権は脅かされ、ベルギー統治のもとでトゥワに課される税も消滅する。明確な記述はないが、恐らくその過程でトゥワの特権は完全に消滅したのだろう。植民地行政が主導する中央集権的な近代国家が完成する中で、森のトゥワは国家から排除されたと考えられるが、こうした変化にトゥワはどう対応していたのか。本稿では、その中核に暴力があったことに着目する。

3. トゥワの暴力

3.1. トゥワと在地民の戦争

シューマッハによれば、トゥワは在地民[16]とは遥か以前から戦争状態にあった。その原因は在地民の森林伐採にあり、トゥワからすれば自らの生存を賭けた正当防衛としての戦争である。ムレラ（図 1 参照）に住む 60-70 歳のチガ人、ルティフンザが言うには、凡そ 200 年前、8 代前に彼の先祖がこの地にやってきた時からトゥワとの抗争が絶えない。

> トゥワが森林封鎖を強要するので、すぐに絶え間ない確執が起こるようになった。「木材を伐採したり、森林を通ってブゴイに行ったり、ビルンガ山脈を越えて北に行って塩取引する者をトゥワは認めなかった。フトゥが優勢になり、トゥワは森林地帯から出ることが出来なくなった。その復讐として、雨を降らせる力を持った小人たちは、壊滅的な雹を降らせてフトゥの農作物を破壊した。」ここで注意すべきは、トゥワは雨乞いなど全く理解していないが、「愚かなフトゥ」を出し抜いて搾取するために、そのように偽ったのだろう。ルティフンザは「トゥワは (本物の) 疫病だ、トゥワは戦い方を知っているが、森の中で戦う」と結論づけている。(Schumacher 1950: 86 筆者訳)

[15] inzogera は鈴の義。トゥワが狩猟に用いた猟犬には鈴がついていたことからくる呼称。
[16] シューマッハの用語ではフトゥ。

しかし、トゥワが防戦一方で森に押し込められた訳ではない。在地民に反撃し、略奪することもしばしばだった。

> ブシルの森林高地では、屈強な山岳地帯の住人たちが執拗にトゥワの権利を侵害し、フトゥとトゥワは絶え間ない戦いで衝突した。この国のハム系支配者 (筆者注：トゥチ) でさえ、自由を愛する人々にあえて近づこうとはしなかった。戦いは通常、白昼行われる。フトゥは略奪され、焼き払われる。熟した作物は収穫され、未熟な作物はそのまま放って置かれる。女性や子供も含め、手の届くところにあるものはすべて破壊される。戦争で捕虜を捕ることはない。「裏切られて家で殺されないように！」　(Schumacher 1950: 252 筆者訳)

ブシルはルワンダの中でもニギニャ王国の支配に抵抗した自主独立の気風で知られる地域である。だからこそトゥワとの戦争も激しかったと推測される。「森林封鎖」や「トゥワの権利」という表現が登場しているが、これが前節で確認したトゥワの森林の所有権、管理権を指すと考えられ、その権利の行使に暴力を辞さなかったことが認められる。

3.2. 森林通行料

次に、森を通る者からトゥワが通行料を徴収していた事実を見る。

> 古代から、森を通過する交易隊商から森林税を徴収することは王によって彼らに与えられた権利だった。人々はそれを知っていて、常に「トゥワの分」、つまり食料の入った小さな追加の包みを用意していた。この税を支払った後、人々は強盗やその他の不都合からトゥワの保護を受けて平和に移動した。しかし通行料の支払いを拒否すると強制的に没収され、抵抗すると負傷者や死者も出た。これが当地の関税法の実態であり、恐らく他の場所でも同様の事が行われている。そのような徴収金は当然、フトゥの間では不人気で (これまた他の地域も同様に) フトゥはあらゆる方法で、新しい圧倒的な支配者であるヨーロッパ人をトゥワに敵対させようとした。 (Schumacher 1950: 60　筆者訳)

森林通行料が王国によって認められたトゥワの特権であったこと、そして在地民がヨーロッパ人を利用することでこの慣習を廃止させようとしていたことがわかる。ではこの強制徴収はどのように行われていたのか。シューマッハは、ムレラ（図 1 参照）のトゥワの比較的若い長セヨーヨの証言を掲げる。

森の端で、彼ら（筆者注：トゥワ）はフトゥの大きな隊商を止め、通行料を要求した。その場所は村落の近くだったので、フトゥは十分な援軍があると信じて戦いを挑んだ。緊急事態の雄叫びが鳴り響き、両陣営の援軍が駆けつける。約 30 人のトゥワが小さな軍隊に直面し、小人たちは軽い小競り合いで激しく押すが、決定的な打撃を与えようとはしない。策略があるのだ。鳥のように森まで引き返して行き、左右に分かれて茂みに隠れる。フトゥは颯爽と前衛を追って、開けた野原のように見える場所に突撃してくる。突然、トゥワは反転し、残忍な挟撃が始まった。「逃げおおせたフトゥはごくわずかだった！」 (Schumacher 1950: 252　筆者訳)

これらの記述から、強制徴収の実態が戦争と変わらないことがわかる。興味深いのは、続けて「かつて私たちは恐れられていたが、いまやトゥワに力はない。もう人がいない。危険な疫病のせいで、トゥワの英雄たちは死んでしまった」 (Schumacher 1950: 252) とあるように、1930 年前後にはそうした戦争が不可能となった原因をトゥワが疫病に求めている点である。シューマッハはトゥワ・フトゥ戦争の停止原因をベルギー統治に求めていたが、それだけではないようである。

3.3. トゥワの王

トゥワと戦争を語る際に欠かせない人物が、ルゲジ（図 1 参照）の沼沢地帯を拠点に、最盛時には東はブシジ、北はビフンゲまで勢力を広げたトゥワの王とも言われるバセブジャ (Basebya) [17]である。

しかし、沼地のトゥワのリーダーであるバセブジャは、国中をうろついて略奪と大混乱を引き起こした。 彼らは長さ約 50km、幅 3km 以上の侵攻不可能な沼の要塞ルゲジに住んでいたが、人々は平地でさえ、彼らとまみえることはせず、バセブジャの姿が見えた瞬間、誰もが飛ぶように逃げた。財産を置き去りにして人々は逃げた。しかし、こうした襲撃はトゥワにすれば脅しに過ぎなかった。「我々の生活基盤である森を破壊し続けるなら、お前たちの畑や倉庫を襲撃するぞ！」 (Schumacher 1950: 60　筆者訳)

ルゲジのトゥワは元から狩猟採集よりも強奪が生業だと言われていたが、バセブジャが特異だったのは、周辺の在地民もバセブジャの元に参集した結果、ニギニャ王国軍及びド

[17] 数多くのオーラルヒストリーを収集してムシンガ王統治下 (1896-1931) のルワンダ史を再構成した Des Forges (2011: 269 n.21) によれば、一般的にバセブジャの母はニラントゥワリという名のトゥワとされる。父は不明という者もいれば、ブコニャもしくはムレラのフトゥ (チガ人) だという者もいる。

イツ軍も撃退した大規模な「反乱」と化したことである。バセブジャの軍事力を恐れた両者は戦闘でバセブジャに勝利することは難しいと判断し、最終的には和平調停を装ってバセブジャを謀殺する[18]。

3.4. 集団内暴力

これまでは、比較的記述量の多いトゥワの集団間暴力を見てきたが、集団内暴力への言及がない訳ではない。ブシ[19]（図 1 参照）のトゥワの事例を見る。

> 酒盛りの後、トゥワの間では深刻な喧嘩が容易に勃発する。誰もが武器を取り、容赦なく攻撃し合う。男は槍を振るい、女と子供は棍棒を叩きつける。事故も珍しくない。トゥワは酔っぱらった仲間に会い、こう考える。「あいつはまた 1 人で飲んでやがる。1 人で酒を飲み干して、おれには一言もない。狩りから戻って来たら、獲物を貪り食っている。おれはいつだって肉も酒もみんなと分けてきたのに。」相手は既に血まみれだ。復讐は起こらない。楽しく酒を回し飲みするうちに、敵意は幸福へと霧散していく（Schumacher 1950: 148 筆者訳）。

ブシはキヴ湖の西部に位置し、筆者のフィールドとは 100km ほど離れている。一様にブシのトゥワと筆者が調査するビルンガ・トゥワを同一視することはできないが、筆者がトゥワの老人に昔の闘争の特徴について聞いた際の特徴「肉の分配を巡って喧嘩が起きていた」という証言とこの事例は合致し、用いられる道具も同じである。また酒がもたらす幸福のうちに敵意が拡散し、復讐へと至らない点は筆者が観察した現在のビルンガ・トゥワの闘争（ふくだ　印刷中）と酷似し、無関係とは考えにくい。ビルンガ・トゥワも当時から同様の集団内暴力に従事していたと推測するのが妥当であろう。

3.5. ムブティと暴力

これまで『キヴ・ピグミー』に記述されている 20 世紀初頭以前のトゥワの暴力を見てきたが、ムブティのように非暴力的とされてきた人々 (Turnbull 1978) も暴力と無縁だった訳ではない。Schebesta[20] (1936 : 76-92) にはピグミー系、ニグロ系[21]双方の口承としてムブティ戦争（Bambuti War）の記述がある。正確な年代はわからないが、ニグロ系からの不当な扱いに耐えかねたピグミー系が反乱を起こし、イトゥリの森から東方の平地へとニグロ系

---

18 バセブジャについては政治史の表舞台に登場したこともあり、ルワンダ史の先行研究からの言及もある。Des Forges (2011: 104-127) が最も詳しい。
19 現在のコンゴ民主共和国、南キヴ州のワラング地区、カバレ地区、カレヘ地区、ムウェンガ地区、ウヴィラ地区などに相当する。ブシ王国など複数の王国が存在した。
20 シューマッハの同時代人で当時のピグミー研究を代表する研究者。
21 いわゆるバントゥー系の農耕民、牧畜民のことを指すシェベスタの呼称。

を追放した。ムブティが戦争を仕掛け、森から他集団を駆逐したという記述は非暴力的なピグミー像に反し興味深いが、しばらくしてまたニグロ系が森に再進出し、ピグミー系を従属的な立場に置いたという。暴力を軸にムブティ社会を考えたときに重要なもう一つの指摘がある。ニグロ系といっても当然一枚岩ではなく、ニグロ系同士で相互に敵対利害関係があり、戦争もあった。その際にムブティは傭兵や斥候として戦力を提供し、場合によっては戦争の勝敗の鍵を握った。つまり、ムブティと他民族の交換を考える際に、ムブティの提供していたものは肉という食料だけでなく、戦闘力も重要な交換財だった。それがベルギーの統治下で「部族」同士の戦争が停止されるに至り、ムブティが交換のテーブルに提供できるものが肉だけになり、他民族との関係がより従属的になったという指摘である (cf. Turnbull 1959)。

4. 考察

シューマッハによれば、少なくとも 18 世紀初頭から 20 世紀初頭までのトゥワは先住民性を根拠として獲得した免責的特権や森林所有権を梃子に、自らの自律性と自由を主張するのに闘争を辞さなかった。森林開発を進める在地民を襲撃、略奪し、彼らとは長らく戦争状態であった。バセブジャの例に見られるように、場合によっては大規模に組織化され、ニギニャ王国やドイツ植民地政府と戦闘した場合もある[22]。

こうした戦争の要因は明確であり、他集団の森林伐採によりトゥワの生存が脅かされたからである。もちろんそうした際に取り得る対策は一つではない。大別すれば、逃走、闘争、従属の三つの選択肢がある。20 世紀初頭、トゥワには森で狩猟採集を営むものと、定住して土器づくりや楽師などを業とする者に分かれていた。森林伐採が進み、森が少なくなる中で、前者はより高地、奥地の森へと避難して以前からの生業を継続し、後者は新しい秩序を受け入れて定住したのではないかとシューマッハは推測している。重要なのは後者が新しい秩序を受け入れても、農業や牧畜を生業としなかった点だが、前者もただ逃げるだけでなく、抵抗し、反撃する点が従来の平和な逃走するピグミー像と異なる。そのような闘争の選択肢を可能にした要因は複数あるが、無視できないのは大湖地域が持つ政治状況である。

5000 年前から現代に至るまでのピグミー・バントゥー関係 (主にコンゴ盆地西部) を分析した Kleiman (2003) によると、中央アフリカ的な世界観のもとでは、土地に眠る先住民の祖先霊や土地の精霊を慰撫して初めて土地を活用できるようになる。従って、移民は先

[22] バセブジャの場合、近隣の在地民などを従え大規模化していることから、彼のいた集団がバンド型の平等主義的な組織形態を維持しているとは考えにくい。他集団の社会形態を取り入れて、リネージやクランを核とするパトロン・クライアント関係で組織化したと推測されるが、組織構造に関する記録がないので確かめられない。筆者が調査地で獲得した証言では、バセブジャはトゥワの王であり、彼が女性を要求したときは差し出さないといけなかったという（2020 年 10 月 13 日、トゥワの女性ダティ（40 歳、女性）の談話）。

住民と家族関係を結び、森林資源のありかや活用法を教えてもらうことで「文明化」された。その過程で先住民たるピグミーと農耕民の融和が生じ、同一言語を使用するようになった。より対等であった関係が 16 世紀以降に変化し、ピグミー系への蔑視や支配が起きた。

トゥワの場合も独自の言語を持たず、肉と作物の交換や猟犬の貸借などに見られる近隣集団との共生関係を考えれば、同じような過程をたどったと考えられる (cf. Schoenbrun 1998: 155-156)。トゥワが先住民として位置づけられていたことは、戴冠式への隣席、農耕民が土地開発の祭にトゥワへの謝礼が必要とされるウブコンデ、トゥワに森林所有権を認めるウブコンデ・ブギンゾジェラからも明確である。ウブコンデはルワンダ北西部に一般的な土地支配制度であり、ニギニャ王国が推進したイギチンジとは異なる (武内 2009: 144-145)。つまりウブコンデとウブコンデ・ブギンゾジェラはニギニャ王国がルワンダ北西部に進出する以前から、ブシル、ルヘンゲリなどの在来王国やリネージ政体との関係において認められた慣習の、19 世紀的な有り様と考えられる。

西暦 1000 年以降、大湖地域では農業が飛躍的に発展した結果人口が増大し、農業に適した土地を巡る競争も激化していた (武内 2022: 89-91)。また、ルワンダ北西部は 18 世紀からルワンダ東・中央部（ギサカ、ンドルグワなど）の国家や戦争から逃れてきた亡命者が数多く流入したフロンティアでもあった[23]。非狩猟採集民が増加し、森林が多く減少する過程で、当初は互恵的であった慣習が不平等化していったと推測される。だからこそ祖先が入植した凡そ 200 年前からトゥワとの紛争が絶えなかったというムレラの在地民の認識があるのだろう。

そうした際に新しくルワンダ北西部に進出してきたニギニャ王国と関係を結ぶことで、トゥワは森の所有権の正当性を刷新したと考えられる。重要なのは、ニギニャ王国がこの地に進出し、一部の在地の王やリネージのチーフとパトロン・クライアント関係を結んだが、直接統治はしなかった点であり、役人の派遣もベルギー植民政府期までできなかった。つまりトゥワは直接の脅威である在地民とのパトロン・クライアント関係を破棄し、新興勢力である遠方のニギニャ王国と提携して、自らの権益の正当性を主張する、遠交近攻とも言える戦略を取った。ニギニャ王国からすれば、自らに服従しない王国などに対抗する軍事力を手に入れられるだけでなく、トゥワを取り込むことで政治宗教的にその地を統治する正当性が得られる。そして先住民としての特殊な地位が、狩猟と森林の権益を保障し、税だけでなく、法の支配からの逸脱も許容する特権をトゥワに与えたと考えられる。

また大湖地域の生態環境も考慮にいれる必要があるだろう。ルワンダ国内に限定すると、18 世紀以来森林は減少しており、トゥワにはこれ以上逃走する奥地が存在しなかったかのようにも思われる。ただし、ビルンガ火山群の森林地帯はウガンダ、コンゴ民主共和国にまたがっており、特に人口が稠密していないコンゴには広大な森林が広がっており、トゥ

[23] チニャガ（図 1 参照）のクラン、エスニシティを研究した Newbury (1988) を参照。

ワは両国にも存在する。両国のトゥワとルワンダのトゥワは現在においても姻戚関係にあるなど、往来が盛んであり、トゥワに逃走という選択肢が存在しなかったとは考えにくい。実際のところ、どのような理由で逃走ではなく闘争を選択したのかは明瞭ではないが、トゥワ対農耕民という二者関係ではなく、トゥワと在地民諸勢力とニギニャ王国という三者関係がトゥワの闘争を可能にし、表面的な従属と実質的な自由と自治を勝ちとることを可能にしたと考えられる。

狩猟採集社会のような小規模社会と国家の関係について考える際、クラストル (1987) は南米の小規模な社会体の主体性を主張し、彼らは間断的かつ恒常的に戦争をすることで強大な国家による支配の発生を防いでいると論じた。闘争的な小規模社会像と対比されるのが、スコット (2013) が論じた「逃走的社会」である。彼は東南アジアの山岳地帯であるゾミアの小規模社会では、国家の拡大に伴い、国家からの支配を忌避する社会がより周縁へと逃走すると論じた。国家が近隣に存在するか否かという政治的条件や、闘争と逃走という志向性の相違があるものの、小規模社会がいかにして国家による支配を回避し、自由と自律を保持するかという人類史的な問い（cf. グレーバー＆ウェングロウ 2023）を扱っている点で両者の議論は共通する。

トゥワの場合、他集団が移住してきた当初は友好的な共生を基調としつつ、森林開発の圧力や差別が強くなるに従い、更なる森の奥への逃走及び在地民との闘争を採択したと考えられる。そしてニギニャ王国という強大な国家の進展を前に、国家から逃走するのではなく、国家と同盟的な関係を結ぶことで、より近隣の政治体と闘争し、先住民としての権利を根拠に自らの自由と自律を保持したと考えられる。

こうした状況に終わりをもたらすのがベルギーによる植民地支配である。ドイツはルワンダ北部で頻発したニギニャ王国への「反乱」を鎮圧しつつも、内政には積極的に介入しなかったが、ベルギーは軍事力を背景に国内の紛争を減少させ、新しい税制を確立し、トゥワは森林所有権を放棄させられた。「トゥワには誰も抵抗できない。助かろうと思えば逃げるしかない」 (Schumacher 1950: 82) とまでチガ人に言われたトゥワも火器に代表される圧倒的な軍事力をもった近代国家の暴力を前にすれば、自らの自由と独立を確保した暴力を奪われ、従属的な立場になるしかない。アフリカ的な政治宗教体制に則っていたニギニャ王国と異なり、ベルギー植民地政権はトゥワに自らの統治を正当化してもらう必要もない。トゥワはただ圧倒的な少数者として公的な記録から無視され、社会的弱者へと縮減された (cf. Lewis 2000)。

しかし、公の歴史から目を転じ、実際の生きられた生を見れば、トゥワの暴力が完全に国家に収奪された訳でもない。筆者のフィールドでの聞き取り[24]によれば、1970 年代以降

[24] この段落に書かれている内容は複数の談話に基づいているが、最もまとまったものは 2020 年 10 月 28 日トゥワの 1 人であるイノサ（20 歳、男性）と実施した半構造的インタビュー。なお、調査地の人名は全員仮名である。

もトゥワによる在地民の畑の強奪という自由が行使され、在地民もトゥワ討伐隊を森林へと繰り出していた。現在もトゥワが県レベルの首長を罵るなど無礼を働いても「トゥワだから」という理由で見過ごされる。王権が認めた特権に類似するような免責が慣習的には存在する。一方で、婚姻忌避、同席忌避などのトゥワへの蔑視 (Taylor 2011) は昔も現在も存在する。トゥワは疎外され、国家から保護を受けない代わりに、一定程度の自由を確保していると言えよう。

100 年前も現在もトゥワは集団内で頻繁に闘争するが、復讐の連鎖のような暴力のエスカレーションが生じることはなく、平等主義的な社会が維持されている点が特徴的である。近代イデオロギーが想定する悪としての暴力、つまり不可避的にエスカレートして恒久化したり、強者が弱者を抑圧し、社会が階層化する契機となるような暴力とは明らかに異なる、感情と身体の共在を動力とする平等主義的暴力がトゥワの集団内闘争の特徴である（ふくだ 印刷中）。この集団内闘争は他民族にも当然知られており、単純な蔑視とは異なる眼差しを生む。ある在地民はトゥワについて「誰もトゥワと争おうなんて思わない。トゥワが石に頭をぶつけたら石が粉々に砕ける」「トゥワには手を出さない方がいい」[25]と語った。トゥワは暴力的であることによって、他集団から「手をだしづらい」と思われることで、干渉を拒んできたと言えるのではないか。

実際、平等主義的暴力は外部との接点において、トゥワを従順な弱者から解放し、「野蛮」だとする蔑視と絡み合いつつも、トゥワに一定の自律性と自由を保証する。現在のルワンダ共和国は統治が相当に行き届いた近代国家として知られている (Crisafulli & Redmond 2012)。確かに首都キガリなどの都市部ではそうだろうが、周縁部では少し事情が異なる。治安を一例にすれば、独立した警察機構は存在せず、選挙で選ばれた無給の保安役を中心とした村民による自治に依拠する周縁部では、法よりも人間関係や情実が優先される。差別と畏怖の混合で眼差されるトゥワに行政は積極的に介入したがらず、トゥワが関わった事件に関する捜査も徹底されない傾向にある[26]。ルワンダ国民一般に対して適応される法による支配が、トゥワに関しては曖昧になる領域が存在する。多少うがった見方をすれば、トゥワは近代国家の内部で現在も集団内で激しく闘争することによって、国家の支配から逃走し、独自の秩序を確保していると言えよう。

5. まとめ

これまで暴力を軸として、ほぼ 100 年前のビルンガ・トゥワと国家の関係について考察してきたが、ここで冒頭の先行研究に関連付ける形で整理する。少数の例外を除いて、国家の存在が希薄だったピグミー研究では、トゥワを国家に組み込まれた非狩猟採集民と見做して研究対象から除外してきた。しかし、実際に 20 世紀初頭のトゥワと国家の関係を分

[25] 2024 年 5 月 31 日、調査助手のマンジ・ロジャーズ（27 歳、男性）談話。
[26] 2022 年 3 月 1 日、トゥワの 1 人であるダルジャ（26 歳、男性）談話。

析して得られるのは、狩猟採集社会と国家のダイナミックな関係という稀少な事例である[27]。

森を伐採する農耕民に対して比較的早くから従属という選択をしたトゥワもいたが、ビルンガ・トゥワはより森の奥へと逃走しながら農耕民との闘争という選択肢を取った。その選択を支えたのが、ピグミー対農耕民という二者関係に収まることのない、トゥワ・トゥチ・フトゥの三者関係である。彼らは狩猟採集を営みつつも、新興国家であるニギニャ王国と同盟関係を結ぶことで自らの狩猟権益の正当性を主張し、在地勢力と対等に闘争し、政治経済的な自由と自律を追求した。換言すれば、トゥワは国家に組み込まれるのではなく、国家に表面的に従属して国家を利用することで、自分たちの生活様式を守った。そして 21 世紀に至り、一見完全に国家に組み込まれたかに見える現在も、狩猟採集的特徴を色濃く保持し、集団内での闘争を継続することで、国家の支配から部分的に逃走することが可能となっている。

従来、「闘争」は暴力、「逃走」は平和と関連づけられ、概ね逃走と平和が狩猟採集社会の特徴と考えられてきた。また「従属」は否定的に評価され、ひとつの選択肢であることも見過ごされがちであった。しかし、Kelly (2013)が指摘するように実際の狩猟採集社会の有り様はより複雑である。本稿から導かれるのは、この闘争・逃走・従属という「選択」と、暴力・平和という「状態」が単線的に硬直したものではなく、複雑に交差しうる複線的な関係であるという事実である。国家と狩猟採集社会の関係には 6 パターン（闘争―平和、闘争―暴力、逃走―平和、逃走―暴力、従属―平和、従属―暴力）が考えられるだけでなく、三者関係になれば理論上は 6×6=36 パターンが考えられる。重要なのは国家を含めた他集団との関係を静的に固定させて本質化するのではなく、闘争、逃走、従属に代表される選択が時に併存しながら、平和と暴力が内包されて流動するダイナミックな相互作用を見逃さないことであろう。暴力と平和自体も対立するものではなく、相互に干渉し合う動的なプロセスとして考えるべきである。だからこそムブティのような逃走的とされる狩猟採集社会にも闘争的な時代があったのであり、現代のトゥワのコミュニティも内部では闘争しながら、外部との接点において平和な均衡を保っているのであろう。

---

[27] ピグミー研究に限定せずに、狩猟採集社会研究全体を見渡せば、狩猟採集社会と国家に関する研究も少なくない。むしろ、国家による土地や人の管理が早くから徹底していた北米やオーストラリアなどでは主流である。アフリカにおいても、例えば南部アフリカのブッシュマン研究では、開発政策が仲介する形で 1990 年代以降から狩猟採集社会と国家の関係が議論されてきた (丸山 2010; Kent 2002; Lee and Hitchcock 2001)。一方で、そうした研究の対象は基本的に国民国家と狩猟採集社会の関係であり、本稿のような非近代国家と狩猟採集社会の関係を分析したものは依然数少ない。

付録

筆者自身はドイツ語に堪能とは言い難いが、近年のテクノロジーの進化を通して、機械翻訳の性能が大幅に向上しており、未修得の言語で書かれたテクストの研究利用可能性は大幅に向上している。もちろん現在の機械翻訳には依然問題もあり、微細な詩的な表現の翻訳や言語学的な精確な分析に耐えるものではないが (Tahseen & Hussein 2024)、論文のような達意の文章を訳出する実用性は達成しており (Zalikha 2024)、狩猟採集社会と国家の関係を問い直す契機を提供しうるシューマッハの著作を検討する学術的意義も高いと判断した。

付録では、こうした新しい技術の可能性と限界について考えるためにも、筆者がとった手法を具体的に開示することで、今後の研究可能性についての議論の土台を提供したい。

まず、シューマッハの著作は著作権が切れているもののデジタル化されておらず、テクストデータ化する必要があった。筆者はキガリにて図書館司書の許可のもと、Adobe Scan というスマートフォンアプリを使用して携帯電話で全ページを PDF 化した。Adobe Scan は自動で OCR 化 (画像データのテキスト部分を文字データに変換する光学文字認識機能) するが、この段階での OCR はかなり不正確である。そこで文書のデジタル化を請け負う企業に PDF データを渡し、人間によるチェックを挟んだ OCR 化作業を依頼した。提出フォーマットは元ページの体裁を維持した PDF と、ナンバリングを維持しつつテクストデータ化された WORD ファイルの 2 種である。この時点での OCR の正確さは 99.7%である[28]。

図 2 原典の PDF 化風景（筆者撮影）

そこから機械翻訳にかけるのだが、使用したサービスは DeepL、Google Translate、Gemini の 3 種である。留意点の一つは、英語やドイツ語のような西洋言語同士の翻訳は正確性が高いが、日本語のような非西洋言語への翻訳は正確性が低くなることである。従って、翻訳言語はドイツ語から英語を選択した。前掲した 3 サービスの中でページ数の多い大容量文書の翻訳に対応しているのは DeepL である。従ってまずは全ページを DeepL で翻訳した。ただ DeepL 翻訳の正確性はそこまで高くはない。そのため一読の際には Google Translate と Gemini の翻訳も活用し、相互参照した。Gemini は特にただ訳文を提示するだけでなく、単語や表現ごとに訳出の注意点を列記するので使い勝手が良い。さらに立論上

[28] 総ページ数 1076 に対しランダムに 11 ページを摘出し、単語単位の正否を計算した。

重要と思われる箇所は自分でドイツ語の原文にあたって確認するとともに、ドイツ語の母語話者であり文化人類学者の Martin Gruber 氏にチェックしてもらった。「概して原文の意図がつかみづらいところがあるが、より理解可能にするのであれば (Gemini の) 翻訳は道理に叶っている[29]」というのが Gruber 氏の総括である。本稿で訳出されている文章は全て、こうした手続きを踏んだ上で日本語に訳されており、最終的な訳文の責任は筆者に存在する。

こうした機械翻訳活用の第一の利点は時間と経済である。OCR 化の単価はページ当たり 610 円であり、納期も 1 ヶ月もかからない。翻訳に用いる Google Translate、Gemini は無料であり、DeepL は月額 3800 円、翻訳自体は数分で終わる。1076 ページ分のドイツ語資料の翻訳が 664,580+3800＝668,380 円で 1 ヶ月とかからず入手可能である。

一方、人間の翻訳家に依頼した場合、ドイツ語→英語であれば大凡$0.1／ワードとなる。筆者の資料は 1 ページ当たり 400～500 ワードなので、これを下限で計算すると、$0.1×400×1076=$43,040 となる。現行のドル円為替レート 155.769[30]をかけると 6,703,910 円となり、文字通り OCR＋機械翻訳と一桁違う。またプロの翻訳者は平均で 1 時間に 300 ワード翻訳できると言われており、本資料場合 400x1076/300=1434.67 時間、翻訳に要する。これを週 40 時間労働で計算した場合、35.86 週かかることになり、9 ヶ月近い時間を要する[31]。もちろん、プロの翻訳家に頼んだ場合、機械翻訳よりも正確な訳が入手でき、自分でチェックする際の負担は圧倒的に少なくなるだろう。しかし、時間もそうだが、何より金額面で個人の研究費から 600 万円も資料翻訳に捻出するのは困難である[32]。

であるならば、前述のように複数の機械翻訳ソフトウェア、自分自身及びドイツ語話者によるクロスチェックをかけることで、翻訳の質を担保しつつ、新しいテクノロジーを活用してドイツ語資料も対象に入れることが、研究の質と幅を向上させると判断した。

機械翻訳の採用の当否は読者の判断を乞うしかないが、本稿では機械翻訳を駆使することで、従来無視されてきたトゥワの歴史的民族誌を研究することが可能となった。このような、埋もれてきた資料がもつ研究可能性はトゥワに限定されるものではないだろう。シェベスタやシュミットなど 20 世紀前半を代表するドイツ語圏の研究者の著作は言うまでもなく、植民地行政官や宣教師の日記など、新たに検討することで先行研究を相対化できる可能性のある資料は少なくない。また問題はピグミー研究に限定される話でもなく、広くアフリカ研究において活用できる可能性がある。もちろん、ネイティブチェックを入れ

---

[29] 2024 年 5 月 8 日私信

[30] 三菱 UFJ 銀行 2024 年 4 月 30 日付ドル円 TTM。 (https://murc-kawasesouba.jp/fx/past/index.php?id=240426) (2024 年 4 月 30 日閲覧)

[31] 適切な翻訳者が複数見つかれば期間は短くなる。3 人いれば単純計算で 3 ヶ月になる。

[32] 筆者は資料訳出に際して、公益財団法人サントリー文化財団からの助成金「若手研究者による社会と文化に関する個人研究助成（鳥井フェローシップ）」を活用した。当該助成金がなければ機械翻訳にかけることも難しかったであろう。ここに記して感謝したい。

るだけでなく、研究者自身が一定程度語学の素養を確保する必要性があることは論を俟たない。一方で、新たなテクノロジーを頭から拒否することも視野狭窄といえるだろう。研究における機械翻訳の可能性と限界について、今後さらに試行錯誤、議論されることが求められる。

参考文献

大石高典. 2016. 『民族境界の歴史生態学― カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民』京都大学学術出版会.

北西功一. 2010.「アフリカ熱帯林の社会 (2) ピグミーと農耕民の関係」『森棲みの社会誌』京都大学学術出版会, pp. 21-46.

木村大治 2003『共在感覚―アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都大学学術出版会.

木村大治. 2010. 「農耕民と狩猟採集民における相互行為研究」木村大治・北西功一編『森棲みの社会誌―アフリカ熱帯林の人・自然・歴史』京都大学学術出版会, pp. 67-73.

グシンデ、マルティン. 1960. 『アフリカの矮小民族 ピグミーの生活と文化』 (築島謙三訳) 平凡社.

クラストル、ピエール. 1987. 『国家に抗する社会』 (渡辺公三訳) 白馬書房.

クラパンザーノ、ヴィンセント. 1991.『精霊と結婚した男: モロッコ人トゥハーミの肖像』紀伊國屋書店.

グレーバー、デヴィッド & ウェングロウ、デヴィッド. 2023『万物の黎明―人類史を根本からくつがえす』(酒井隆史訳) 光文社.

スコット、ジェームズ. 2013. 『ゾミア ― 脱国家の世界史』 (佐藤仁監訳) みすず書房.

武内進一. 2000. 「ルワンダのツチとフツ ― 植民地化以前の集団形成についての覚書」武内進一編『現代アフリカの紛争 ― 歴史と主体』アジア経済研究所, pp. 247-292.

武内進一. 2009. 『現代アフリカの紛争と国家 ― ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ ジェノサイド』明石書店.

武内進一. 2022. 「中部アフリカ ― ポストコロニアル国家の生成史」『岩波講座世界歴史 18 アフリカ諸地域～20 世紀』岩波書店, pp. 175-197.

鶴田綾. 2018. 『ジェノサイド再考 ― 歴史の中のルワンダ』名古屋大学出版会.

野澤豊一・川瀬慈 (編). 2021. 『音楽の未明からの思考 ミュージッキングを超えて』アルテスパブリッシング.

ふくだぺろ. 印刷中. 「わたしたちは毎日殺し合っている ―トゥワ・ピグミーの平等主義的暴力とポリエモーション＝ボディ」『文化人類学』.

松浦直毅. 2012. 『現代の< 森の民> ― 中部アフリカ, バボンゴ・ピグミーの民族誌』 昭和堂.

丸山淳子. 2010. 『変化を生きぬくブッシュマン: 開発政策と先住民運動のはざまで』世界思想社.

山内進、加藤博、新田一郎（編）. 2005. 『暴力-比較文明史的考察』東京大学出版会.

Bahuchet, Serge. 2014. "Cultural diversity of African pygmies". in B. Hewlett (ed.) *Hunter-Gatherers of the Congo Basin: Cultures, Histories, and Biology of African Pygmies*. Routledge, pp. 1-30.

Byanafashe, Déo & Paul Rutayisire (supervision). 2016. *History of Rwanda from the Beginning to the End of the Twentieth Century*, National Unity and Reconciliation Commission.

Crisafulli, Patricia & Andrea Redmond. 2012. *Rwanda, Inc.: How a Devastated Nation Became an Economic Model for the Developing World*. Macmillan.

Des Forges, Alison. 2011. *Defeat is the Only Bad News: Rwanda under Musinga, 1896–1931*. Univ of Wisconsin Press.

Frankland, Stan. 1999. "Turnbull's Syndrome: Romantic Fascination in the Rain Forest". In K. Biesbrouck, S. Elders & G. Rossel (ed.) *Central African Hunter-gatherers in a Multidisciplinary Perspective : Challenging Elusiveness*. CNWS.

Gusinde, Martin. 1949. *Die Twa-Pygmäen in Ruanda: Forschungsergebnisse im Tropischen Afrika aus dem Jahre 1934*. Missionsdruckerei St. Gabriel.

Gusinde, Martin. 1952. "Book Review on "Expedition zu den Zentralafrikanischen Kivu Pygmäen (Twiden) . Die Physische und Sociale Umwelt der Kivu-Pgymäen" by P. Schumacher". *American Anthropologist*. 54(2): 245-247.

Gusinde, Martin. 1954. "Wilhelm Schmidt, S.V.D., 1868-1954". *American Anthropologist*. 56(5): 868-870.

Hewlett, Barry. 2014. "Introduction". In B. Hewlett (ed.) *Hunter-Gatherers of the Congo Basin: Cultures, Histories, and Biology of African Pygmies*. Routledge, pp. xvii-xxix

Joiris, Daou. 2003. "The framework of Central African Hunter-gatherers and Neighboring Societies". *African Study Monographs Supplementary Issue.* 28: 57-79.

Kelly, Robert. 2013. *The Lifeways of Hunter-Gatherers: the Foraging Spectrum*. Cambridge University Press.

Kent, Susan (ed). 2002. *Ethnicity, Hunter-Gatherers, and the "Other." Association or Assimilation in Africa*. Smithsonian Institution Press.

Kleiman, Kairn. 2003. *The Pygmies Were Our Compass: Bantu and Batwa in the History of West Central Africa, Early Times to 1900 CE*. Heinemann.

Köhler, Axel & Jerome Lewis. 2002. "Putting Hunter-gatherer and Farmer Relations in Perspective". in S. Kent (ed.) *Ethnicity, Hunter-gatherers, and the 'Other'*. Smithsonian Institution Scholarly Press, pp. 276-307.

Lee, Richard B. and Robert K. Hitchcock. 2001. "African Hunter-Gatherers. Survival, History, and the Politics of Identity". *African Study Monographs Supplement*. 26: 257 – 280.

Lewis, Jerome. 2000. *The Batwa Pygmies of the Great Lakes Region.* Minority Rights Group International.

Lewis, Jerome. 2014. "Egalitarian Social Organization: The Case of the Mbendjele BaYaka". in B. Hewlett (ed.) *Hunter-gatherers of the Congo Basin: Cultures, Histories, and Biology of African pygmies.* Routledge, pp. 219-244.

Montagu, Ashley. 1978. "Introduction". in A. Montagu (ed.) *Learning Non-Aggression*. Oxford University Press, pp. 3-11.

Newbury, Catharine. 1988. *The Cohesion of Oppression: Clientship and Ethnicity in Rwanda, 1860-1960.* Columbia University Press.

Newbury, David. 2009. *The Land Beyond the Mists: Essays on Identity and Authority in Precolonial Congo and Rwanda.* Ohio University Press.

Republic of Rwanda. 2014. *Official Gazette no 41 bis of 13/10/2014*. Kigali.

Rupp, Stephanie. 2003. "Interethnic Relations in Southeastern Cameroon: Challenging the 'Hunter-Gatherer'–'Farmer' Dichotomy." *African Study Monographs Supplement.* 28: 37–56.

Rupp, Stephanie. 2011. *Forests of Belonging : Identities, Ethnicities, and Stereotypes in the Congo River Basin.* University of Washington Press.

Schebesta, Paul. 1936. *Revisiting my Pygmy Hosts*. Translated by G. Griffin. Hutchinson and Co.

Schebesta, Paul. 1951. "Bibliographie "Expedition zu den zentralafrikanischen Kivu-Pygmäen: I. Die physischeund soziale Umwelt der Kivu-Pygmäen (Twiden) " by Peter Schumacher" *Anthropos*. Bd.46 H 5/6: 1045-1050.

Schebesta, Paul. 1958. "In Memoriam P. Peter Schumacher, 1878 -1957". *Anthropos*. Bd.53 H ½: 233-236.

Schoenbrun, David. 1998. *A Green Place, a Good Place: Agrarian Change, Gender, and Social Identity in the Great Lakes Region to the 15th century*. Heinemann.

Schumacher, Peter. 1949. *Expedition Zu Den Zentralafrikanichen Kivu Pygmaen (Twiden) . I. Die Physische Und Sociale Umwelt Der Kivu Pygmaen*. Institut Royal Colonial Belge.

Schumacher, Peter. 1950. *Expedition Zu Den Zentralafrikanichen Kivu Pygmaen (Twiden) . II. Die Kivu Pygmaen*. Institut Royal Colonial Belge.

Tahseen, Wesam & Shifa Hussein. 2024. “Investigating Machine Translation Errors in Rendering English Literary Texts into Arabic”. *Integrated Journal for Research in Arts and Humanities.* 4(1): 68-81.

Takeuchi, Kiyoshi. 2014. “Interethnic relationships Between Pygmies and Farmers”. in B. Hewlett (ed.) *Hunter-Gatherers of the Congo Basin.* Routledge, pp. 299-320.

Taylor, Christopher. 2011. “Molders of Mud: Ethnogenesis and Rwanda's Twa”. *Ethnos.* 76 (2): 183-208.

Turnbull, Colin. 1959. “Legends of the BaMbuti”. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland.* 89(1): 45-60.

Turnbull, Colin. 1961. *The Forest People*. Natural History Press.

Turnbull, Colin. 1978. “The Politics of Non-Aggression (Zaire)”. in A. Montagu (ed), *Learning Non-Aggression.* Oxford University Press, pp. 161-221.

Vansina, Jan. 2004. *Antecedents to Modern Rwanda: the Nyiginya Kingdom.* Univ of Wisconsin Press.

Verdu, Paul. 2016. “African Pygmies”. *Current Biology*. 26(1): 12-14.

Verdu, Paul. & Destro-Bisol, Giovanni. 2012. “African Pygmies, What's Behind a Name?”. *Human biology*. 84(1): 1-10.

Woodburn, James. 1982. “Egalitarian Societies”. *Man.* 17(3): 431–451.

Zalikha, Zalikha. 2024. *Accuracy and Acceptability of DeepL Translate in Translating Legal Document* (Doctoral dissertation, UIN Sunan Gunung Djati Bandung).